
バグを右手に、いざ進め

Perolin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バグを右手に、いざ進め

【Nコード】

N0526BA

【作者名】

Perrolin

【あらすじ】

高校2年生の俊馬と妹の夏希は、Genesis Onlineテストに参加する事になった。俊馬達はファンタジー世界を純粋に楽しむが、アクセントに巻き込まれて…

ブローグ

ゴオツゴゴゴオツ

巨大な火球が一瞬前まで俺がいたところで爆ぜた。

手に持つ剣を盾にして爆風を避けると、一気に前へ走る。

シュー シュー

目の前にそびえ立つ竜の口には、もう次の火球が出来かけている。俺は足に力を込め顔の高さまで飛び上がると、両手に握った剣を竜の脳天に振り下ろした

「……………きて……………」

ん？何だろう？聞き馴染んだ誰かの声が聞こえる……

「……………つきろつ……………起きろやボケエ！！」

バキッ

寝起きの顔面に枕が振り下ろされる。あれ？柔らかいはずなのに痛えや。

「って枕カバーにトロフィー入れてんじゃねえ！」

俺はトロフィー入り枕カバーを、再び振り下ろそうとしている妹をしっかりとつけた。

「だって起きないじゃん、兄ちゃん。今日が何の日か覚えてないの？」

妹の夏希なつきが腰に手を当てて聞いてくる。ノースリーブの白いサマードレスから覗く肩が、兄の俺から見ても眩しい。

「おい、まだ六時じゃねえか

なんでこんな時間からオシャレしてんだ？」

「8時まで家を出ないと間に合わないからよ。私まだ準備何もし

てないから、兄ちゃんに手伝って貰わないと！

ほら、バスが出るまで後2時間半！」

「はあ？バス？何言ってるんだ？」

夏希が呆れたように首を振る。

「今日から、GOのテスト開始だって、私3週間前から言ってたよね？」

俺はハツとして机の上のPCを見る。スリープモード中でも、カレンダーと時計だけ表示するように設定しているホログラムキーボードのノートPCは、今日が2101年8月1日である事を示していた。

3週間前の事だ。

「兄ちゃん、良い知らせと、良い知らせがあるんだけど、どっち聞きたい？」

「良い知らせから頼む」

「オツケー、じゃあ良い知らせから。」

この話は、いつもの様に突っ込み役のいない兄妹の会話から始まった。

「実はね、父さんから、ハワイのクルーズに連れてってくれらってメールが来てたんだ。

出発は、8月1日。」

「へー、楽しみだな。で、良い知らせの方は？」

夏希がニヤリと笑う。こういう時、大抵は父さんが悲しむ結果になると、俺は経験から知っている。

「実は、Genesis - Onlineのオープン テストの応募が当たったんだ！

ホテル・アンジェラスで3週間泊まり込み。出発は8月1日だけど、兄ちゃん来られるよね？」

夏希は真つ黒な封筒を二枚 22世紀になった今でも、重要書類等のは紙媒体だ つきだして、今度はニツコリと笑う。差出人は「株式会社 Last Fruit」、宛先は俺たち兄妹の名前

とのさわしゅんま
「外澤俊馬」と「外澤夏希」 になっていた。

Genesis - Onlineとは、ゲームソフト制作・開発会社の「株式会社 Last Fruit」が開発したVRMMORPG (Virtual Reality Massively Multiplayer Online Role - Playing Game) である。「Last Fruit」社は、これまでもMMORPGで収益を重ねてきた実績のある会社なため、VRに手を出したのは今回が初めてであるにも関わらず、期待度はものすごく高かった（というのは、同級生のオンゲーオタクの友達の話である）。

また、オープン テストであるに関わらず「応募」、「抽選」というクローズドな方法をとったのは、まだVR機器の普及率が30パーセントに満たないかららしい。事実、社会全体で見ればかなり裕福な方である俺の家にもVR機器は置いてない（俺達兄妹に購入する財力が無いだけで、家庭全体の財力としては、購入可能だ）。勿論、VR機器を所持している者なら、わざわざ応募しなくてもオープンテストには参加できる。

まあ、それはともかくとして

俺は封筒を受け取ると中身を出し、素っ気ない文字だけのレター

と、飾り文字で「Genesis - Online」と書かれたチケツトを見比べて、重々しい顔で妹の方へ向き直った。

夏希は緊張の面持ちで俺の言葉を待つ。

「勿論さ」

大きくうなずくと、俺たちはニヤリと笑みを交わし合った。そう、父さんは犠牲になったのだ…

そして現在。

俺は妹のコーディネート 真っ赤なポロシャツにデニムパンツ

に着替えると、妹の渡してくれた弁当を鞆に詰め込む。階段を駆け下りると、お手伝いの沢村さんに挨拶をしてリビングの扉を開けた。そこには父さんが、盛大に苦笑いしながら座っていた。

「帰ってくるならメールくらいよこせよ」

「三週間くらい前に夏に聞いただろ？今日からハワイだって。俊も夏もゲームしに行っちゃうってんだから、俺は仕方なくぼっちクルーズと決め込む事になったんだよ。」

そういえばそうだった。俺は三週間前、さらっと流した夏希の言葉を思い出した。

「今年も行けなくてごめんねー」

来年はきつと、一緒にいられるよ」

夏希が悪戯っぽい笑顔で慰める。夏希はまだ高校1年だが、表情の使い分けはベテラン女優に勝るとも劣らないくらいに、上手い。

「ああ、来年は一緒にいたいな」

父さんは、簡単に夏希の笑顔に丸め込まれてしまった。

「さあ、そろそろ時間だろ？俺の出発は夜の便だから、お前らをおくってくことくらいはさせてくれよ。」

1年で3ヶ月しか帰って来れない俺の、ちょっとした罪滅ぼしなんだからな。というか、ぼっちつて寂しいんだからな。」
「そんなこと気にしなくても大丈夫よ。父さんがいない間、私たちはあんな事やこんな事を……」

「おい俊馬、今度二人つきりで今後の兄妹関係について話そう。」
「いやいや、俺は何も……！」

親子三人の会話を聞いて、沢村さんはクスクスと笑っていた。

「ず、ずいぶんとでかいじゃねえか」

「そうだね。すごい大きい」

「これ200人くらい乗れそうなんじゃないか……？」

俺たちが前にしたバスは、言葉通り簡単に200人くらい乗れそうな大きさを誇っていた。

22世紀になっても、車が空を飛ぶ、ということではなく（技術的には可能だが、空路整備やら自動車犯罪防止策やらで、馬鹿にならない人件費がかかるので経済効果は望めないという行政の判断らしい）、相変わらず地面を走行している。しかし、空を諦めたからと言って他の部分の技術に大きな進歩が見られたかという点、そうでもない。自動車自動運転システムは一般化されたし、長年開発されていた「eyesight」等の事故防止技術の進展も、自動車事故年間件数0件という長年の人類の目標を達成するのに一役買っているとはいえ、どちらも100年前から存在はしていた技術だ（100年前の人が見たら、自動車事故年間件数0件なんて夢のような話だと思つかもしれないが）。

とにかく、とんでもなく巨大なバスを目の前に、俺達は立ちすく

んで「大きい」という意味の言葉しか吐かないアンドロイドのようになっただけだ。

近くの乗組員が声をかけるまで、そのやりとりは続いていた。

いつまでも手を振り続ける父さんが見えなくなるまで窓際に立っていた俺達は、バス内にある個室に荷物を置いて落ち着いていた。驚くべき事に、ベッドからクローゼット、洗面台まで完備されている。まるで小さなホテルじゃないか。恐るべき待遇に、俺は感心した。ベッドがダブルなのには感心しないが。

「いいよ、兄ちゃんベッドで寝てても。どうせ1時間で着くし、私はクローズドの攻略サイト見てるから。」

夏希が珍しく優しいぞ！前日、3時まで課題をやっていた俺の体を思ってくれるなんて…いや、そういえば、昨日3時まで課題をやらされたのは、夏希の分まで手伝わされていたからだ…

俺は妹の言葉に素直に従い、ダブルベッドに大の字に寝て夢の世界へダイブした。

こうして、俺達の長い長い夏休みは始まったのであった。

(1) 始まりの前(前書き)

第一章始まります。

まだゲームは始まりません。

(1) 始まりの前

「…きろっ……起きろっ！」

バキッ

「いってえ！」

この状況にデジャブを感じる。

俺は目を開くと、二度目の攻撃をしようとしている妹を制して大きく伸びをした。

「到着したよ、兄ちゃん！」

妹がはしゃぎながら、枕カバーの中から車内に置いてあったシャンプーの瓶（ガラス製!!!）を取り出した。…今度はそれだったか

…

「これ、折角だから貰って行こうかな？」

「いいと思うぜ、どうせホテルにも同じの置いてあるだろうけどな」
ホテル・アンジェラスは、株式会社「Last Fruit」の親会社「Last Fruit Holdings」が営業しているからだ。全国にチェーン展開しており、GOのテストは、北海道、東京、大阪、名古屋、長崎の5箇所のアンジェラスで行われる。
「まあ、貰えるもんは貰っとくでしょ！」

乙女とは程遠い、どケチ感覚の妹がニヤリと笑う。俺は自分の荷物と、ニコニコ顔で差し出された妹のキャリーケース（重い!!!）をバスから下ろし、目の前のホテルを見上げた。

70階建て（と言っても、客室があるのは60階までで、それよりは展望台やレストランだ）の超高層ホテルは、真夏の太陽を浴びて燦々と輝いていた。

ホテルの自動ドア（内部の冷気を逃さないため通過する物体の形状に合わせて必要最低限しか開かない）を通り、ロビーに入る。中

は白を基調とした王室の様な造りで、天井がやたらと高い。見上げると、ルネッサンス様式で描かれた女神やら天使やらが楽しそうに”踊って”いる。壁自体が巨大なディスプレイになっっているようだ。何でも最新技術を使えば良いってもんじゃ無いと思うんだけどな…

受付のニコニコお姉さんに2人分のチケットを渡す。

「外澤様、3037号室の鍵†でございます。」

小さな宝石の付いた指輪だ。ホテル・アンジェラスで大規模な改装作業があったとは聞いていたが、まさかカードキーを指輪にしちまうとはな…夏希は喜んでいるが。

「Genesis・Onlineオープン テストのお客様ですね。チケットに同封されていたリーフレットの、タイムテーブルに従ってご行動ください。」

「はい」

次の予定は、確か12食時にアバターキーの配布だ。つまり約2時間の余裕がある。客室へ行って荷物広げて寝るくらいの時間はあるな。いや、寝るのはやめておこう…

客室は、ファンタジールームだった。な、何を言っているのか分からないだろうが…

とにかく、ファンタジーだった。

まずは入り口だ。「3037」と書かれた扉の横に、こぶし大の大きさで魔方陣が描かれていた。そこに指輪をかざすと、魔方陣が回り「カチツ」という解錠音がして、扉が開いた。そのときの俺達兄妹のテンションはすでにマックス。

しかし、本当の驚きはこれからだった。部屋に入ったとたん、7色の光のパレードが繰り広げられたのだ。部屋全体がディスプレイ

だったようだ。特に足下では、絨毯が感圧式起毛ディスプレイになっていて、歩いた跡がピカピカ光る。俺達は迷わず、照明の電源を切った。

「はあ、何これ。目がチカチカするよ」

夏希が目をぱちぱちさせて言う。そりゃそうだろう。薄暗い廊下から部屋に入ると突然光の洗礼だなんて聞いてない。これはクレームが殺到するんじゃないか？

「まあ、綺麗だったし良いじゃねえか。それより、さっさと荷物まとめようぜ。」

この部屋はスタンダードツインルームらしい。ホテルのクラスと言えば「スイート」しか知らないし、それしか泊まったことがない（という話を友達にしたら、ものすごいジト目で睨まれた）。だからこの部屋に入ったときの第一印象は、兄妹そろって「狭いなあ」だった。まあ、一日のほとんどをVRの世界で過ごすことになるのだから何も問題はないが。テーブルに置いてあるパンフレットによると、この部屋はだいたい35平米らしい。まあこれでも、一般ホテルと比べたらかなり大きい方なんだろう。

扉を入ってすぐ左がシャワー&トイレルーム。奥に行くと左にベッドが二つ、右にデスクトップ端末二台。さらに奥には、2メートル半くらいは有りそうな真っ黒なカプセルが二台。VR式五感デバイス「Virtual-Sense」だ。因みに、壁ディスプレイを切ったらただの白い部屋だった。

荷物をまとめ終えて、夏希がシャワーを浴びている間、俺はVR機器を観察していた。ちょうど100円玉サイズの電源ボタンを押すと、機器のカバーに「Setting」、「Genesis-online」の選択肢が表示される。GO以外のソフトウェアはイ

ンストールされていないのだろう。「Setting」を押すと、詳細な設定画面が出た。これはデフォルト状態からいじらない方が良さだろう。一番上の「Body Measurement」に目がとまった。選択すると、「ピー」という警告音と「アバターキーを入れて下さい。」というメッセージが表示された。なるほど、これで身体測定をして、ゲーム内のアバターを作成するのか。

「あんまりいじって壊さないでよー」

背後からの声。とっさに振り返ったりしないのは、17年間の兄としての経験のおかげだろう。夏希は風呂をあがると、体の火照りが冷めるまで、たとえ兄の前でも全裸で行動する。兄妹といえ、年頃の美少女が目の前で全裸になるのは精神衛生的に問題ありだ。

「兄ちゃんもシャワー浴びて来なよ。私はまた攻略サイトみてるからさ。」

「おっけー、じゃあ浴びてくるわ」

着替えをもって立ち上がる。シャワールームへ向かう途中、一糸纏わぬ姿でベッドに大の字になっている妹の姿が目映ったが、全力で無視した。

12時、アバターキー配布の時間だ。勿論俺はワクワクしている。夏希なんてベッドの中で悶えまくっている。

「兄ちゃんもらってきてー」

「……はあ？」

「なんでだよ。一緒に行こうぜ」

「だってチケットが有れば、私の分も貰ってくれるじゃん？」

「いや、まあ、それはそうだけれども」

「……お前、もしかしてまだ裸か？」

夏希が顔だけ出してニヤリと笑う。

「早くキーとウェア貰ってきて。」

ウェアとは、アバター作成時の身体測定の際に身につけるスーツの通称で（正式名称は知らない）、正確な測定のため全裸に直接着ることになる。つまり夏希はキーが届き次第、即行でウェアに着替えてアバター作成をしようとしているのだ。俺は仕方なく、二人分のチケットを持ってロビーに向かった。勿論、右手にはルームキーである指輪が光っている。

ロビーに向かうと、地下の大会議室に通された。企業のお偉い様方が使うその部屋は、ロビーとは違い、赤を基調にしたゴージャスな作りになっている。

「そちらにお並び下さい。」

男性係員の指示に従い、7つ有るうちの右から3番目の列に並び、まずは身長170〜179センチのところだ。チケットを見せると身長を聞かれて（俺は173センチだ）、ウェアと、印鑑大で円筒形のアバターキーを受け取る。問題は次だ。夏希の身長は160センチのため、一つ左の列に移らなくてはならない。もうすでにウェアを持っていて、しかも周りの人より頭一つ抜き出ている俺が、注目を集めないわけがない。そんな中で女性用のウェアを貰うことは、他者からの視線をより鋭くする行動に違いなかった。俺は視線の痛みを耐えながら、大会議室を後にした。

部屋に戻ると、夏希が持ってきた弁当をテーブルに広げていた。基本ぐうたらな夏希の行う唯一の家事が、料理だ。この弁当も沢村さんと一緒に作ったのだそうだ。お手伝いの沢村さんは、まだ母さんが生きていた時から家にいた人で、俺たちにとってはただのお手伝いさんではない。夏希に料理を教えたのも沢村さんだ。

布団にくるまっている夏希にウェアを投げると、着替えている夏希を背に、俺は昼食を食べる。弁当事情は20世紀から殆ど変化をしていない。出汁巻き卵にありついていると、VR機器から電子音がした。どうやら一瞬で着替え終えて、もう身体測定へ移行しているようだ。

VRの身体測定では、骨格、筋肉や脂肪、内臓の質量の分布などを詳細に調べる。VR世界で体を動かす時、現実世界の身体と重心が異なれば、バランスが取れず上手く体を動かす事が出来ないからだそうだ。

「兄ちゃんも早くやつちやいなってー」

やっとまともな服を着た夏希に声を掛けられた。俺が自分の弁当を3分の2程食べている5分程の時間で、ウェア着替え？測定？普段着替えをやってのけたらしい。恋する乙女は何とやらとは言うが、それはゲームにも適用されるのか？俺はそんな事を考えながら、夏樹の言葉に相槌をうつ。夏樹は俺の向かいに座ると（今度は白いTシャツを着ている。ジャストサイズのため、少し目のやり場に困る）、自分の分の弁当を開ける。

「おー、やっと飯にありつけるぜえっ」

そうだった…こいつは決して乙女ではなかった…

「外装どうしようかな？」

「変える必要無いだろ。普段と違う顔で生活したらなんかゲシユタルト崩壊しそうだしな」

「顔じゃないよー」

肌の色とか目の色とか髪とかだよ。せつかくのVR世界なんだから、非日常を楽しまなくちゃ。」

確かにそれもそうだ。それに、GOは剣と魔法の織り成す中世ヨーロッパのファンタジー世界なのだから、黒髪黒目黄色肌では世界観にマッチしない。

「やっぱ兄妹で何かしら共通点持たせたいじゃん。髪黄色とか、顔真っ白とか」

「どこの世紀末バンドだよ…」

でも共通点つてのは良いかもな

どっちにしる、ログイン開始は明日だし、俺が測定終わってからで良いだろ。」

「そうだねーじゃあ適当にゲームして待ってるから、ちゃっちゃんとやって来ちゃってよ」

「あんま急かすなよ。分かってるからさ」

夏希が昼食をかつこみ始める。今から明日のログインが楽しみなんだろう。俺だってログインは楽しみだ。でも何か、ちょっとした不安のようなものが心の隅にある。でも、VRなんて初めてなんだから仕方が無い事なのだろう。俺はそう片付けて、残りの弁当を頬張った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0526ba/>

バグを右手に、いざ進め

2012年1月2日00時47分発行